

第113回 三方限古典塾（'16, 3, 17）

洪 自誠（1561～1616）「葉根譚」（その3－30）

- 1 身は繫^{つな}がざるの舟の如し。一に流行^{いつ}坎止^{かんし}するに任す。心は既に灰となれるの木に似たり。何ぞ刀割^{とうかつこうと}香塗^{まか}するを妨げん。 後集 48

（意訳） わたしのからだは、綱を解かれ繫がれていない、捨てられた小舟のようなものである。どこかへ流れていくのも、淀みで留まるのもまったく気にしない。

わたしの心は、灰のように冷めきった木のようなものである。刀で割られて器になる苦痛も香を塗られる喜びも感じない。自然の摂理にしたがって任せっきりでである。

（余説） 自分のからだや心は、自分の思い通りにはならず、ままならぬものである。だから、何ものにもこだわることなく、融通無碍^{ゆううずうむげ}に生きなさい、と教えています。前回に続いて物事に執着することへの戒めと、悠々自適に生きることの薦めです。

「繫がざるの舟」は、莊子にでてくる言葉を踏まえ、賢しらに人に訴えたりすることを戒め、無心にして流れに任せ、自然に生きている至人の無為なる姿に例えています。

（参考） 莊子・列禦寇^{れつぎよく}32「巧者は勞して知者は憂ふ。無能なる者は求むる所無く、飽食して遨遊^{ごうゆう}す。汎として繫がざるの舟の若く、虚にして遨遊する者なり。」（何者をも外に求めず、腹一杯の満ち足りた心で遊び楽しみ、無心にして心を俗世間の外に遊ばせるものだ。）

- 2 人の情は、鶯^{うぐいす}の啼くを聴かば則ち喜び、蛙^{かわず}の鳴くを聞かば則ち厭う。花を見れば則ち之を培^{つちか}わんことを思い、草に遭^あわば則ち之を去らんことを欲す。俱^{とも}に是れ形氣^{けいき}を以て事を用うるのみ。若し性天^{せいてん}を以て之を視ば、何物か自ら其の天機^{てんき}を鳴らすに非ざらん、自ら其の生氣^{せい}を暢ぶるに非ざらんや。 後集 49

（意訳） 人の心は、ウグイスのさえずりを聞くといいなあと喜び、カエルの鳴き声には騒がしいと嫌に感じるのが常である。また、美しい花を見ると家に植えてみようかと思い、雑草が目に入るとそれを抜いてしまおうとする。しかしこのように思うのは、いずれもものごとの表面的な形や性質だけから判断しているに過ぎない。

もし、それらの内面的な性質や本質に即して見たなら、生きとし生けるすべてのものが天から授かったその本性のままに鳴らないものがあるだろうか。また、どれがその真の天性・命を思う存分に発現しないものがあるであろうか。

（余説） 美しい園芸花と雑草を差別し、ウグイスのさえずりとカエルの鳴き声とを差別する心が、「美と醜」や、「富と貧」「貴と賤」などを差別する心につながるというのですからなかなか厳しいものです。ただ、自然に限らず、何事であろうとも表面的な見方に留まらずに、その内面まで思いを致すように努めることはできそうです。今月のカレンダーに「花が咲く。命尽くして花が咲く。」とあります。蝶には蝶が、毛虫には毛虫が天から授けられている天性があります。まさに「虫が鳴く。命尽くして……」です。

仏教では、「草木国土悉皆成仏^{しつがい}」（草木や国土のような心を持たないものも皆成仏する）や「生きとし生けるものすべてに仏の命をみて無益な 殺生は慎む」と教えています。

（参考） 道元・正法眼蔵（菩提薩埵四摂法）「徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし」

3 花、盆内に居らば、終に生機に乏しく、鳥、籠中に入らば、便ち天趣を減ず。
 若かず、山間の花鳥の、錯雑にして文を成し、翱翔すること自若たり。自ず
 からは是れ悠然として会心するには。 後集 54

(意識) 美しい野生の花も植木鉢に植えられると、やがては生気を失ってしまう。野鳥も鳥かごの中で飼われていると、その本来の趣きを失ってくる。やはり、山間の花や鳥は、人里離れた自然の中で、入り交じり集まって美しい彩りをなしたり、思いのままに飛び回ったりして、自ずと本来の心になってくる姿には及ばないものである。

(余説) これは「自然のものは自然に帰せ」という戒めですが、400年昔の話であり、現代のように多くの栽培種や家禽が存在しなかった状況を考えることも必要です。

我が国には自然を身近に取り込んだ築山や盆栽という優れた伝統文化もあり、海外においても、現在注目されているようです。高山植物など特別なものはもちろんですが、人や事物など何れにおいても、本来それに相応しい場所があることに配慮したいものです。特に人事では、その人が持って生まれたものを生かすために適材適所が肝要です。

(参考) 播磨の瓢水「手に取るな やはり野に置け 蓮華草」

(もっとも、この句には別の意味もあるようです。さて、どんな意味でしょうか)

4 世人は、只我の字を認め得ること太だ真なるに縁のみ。故に、種々の嗜好、
 種々の煩惱多し。前人云う、「復我有るを知らず、安んぞ物を貴しと為すを
 知らんや」と。又云う、「身は是我ならずと知らば、煩惱も更に何ぞ侵さんや」
 と。真に破的の言なり。 後集 55

(意識) 世間の人は、自分には「我」というものがあるということにあまりにとらわれ過ぎていて。そのために、さまざまな好き嫌いや心身をわずらわす諸々の妄念が多くなっている。古人の詩には、「本来、人に自我などがあるということなどは分からない。それなのに、分からないものが貴いなどということ、どうして言えるのだろうか」。又、こうも言っている。「この身が真の我でないことが分かれば、煩惱などで悩まされることなど、あるはずもない」。これはまさしく真理を言い当て尽くした名言である。

(余説) ここで言う「我」とは何かが難題です。「私は」「私も」「私としては」などと考える自分が「我」であり、「これこそが私」という明確なものが果たしてあるのか分かりません。仏教では、「諸法無我(いかなる存在も、永遠不変の実体はない。これこそが私という人間の本质・実体などはない)」とか、「我とは、自己のうちにある永遠不滅の固定の実体。ここから種々の欲望や煩惱執着が生ずるので無我を説く」そうです。煩惱とは「貪・瞋・痴・慢・疑・見」を基本として、百八あるとも八万四千あるとも言われます。

特に、戦後の教育では「個性の重視」が強調され、その結果「俺が、俺が」と自分に対しての執着が強くなり、そこから煩惱に悩むことが多くなったとも言われます。

(参考) 陶淵明・飲酒 「故人我が趣を賞で、壺を挈えて相いに至る。荊をて班て松下に坐し、數斟にして已に復た酔う。父老雑り亂れて言り、觴酌行次を失う。我の有るさえ知るを覺えず。安んぞ知らん物を貴しと爲すを。悠悠たるものは留まる所に迷うも、酒中深き味わい有り。」(其十四)